

淑徳大学

アーカイブズ・ニュース

NEWSLETTER of SHUKUTOKU UNIVERSITY ARCHIVES

第13号 平成28年(2016)8月1日発行



— リニューアルされたアーカイブズ展示室 —

本年4月4日、淑水記念館3階の淑徳大学アーカイブズ展示室が生まれ変わりました。展示室は「特別展示室」「吉田久一展示室」「展示室」の3ブロックからなり、現在は「吉田久一展示室」で「吉田久一展—社会事業史研究のあゆみ—」を開催しています。「特別展示室」では11月の龍澤祭にあわせて特別展を開催する予定ですが、それまではアーカイブズがこれまで開催してきた4つの特別展を振り返る展示を行っています。

展示室やエントランスには木材を多用し、「和」の雰囲気漂う空間となっています。ぜひお立ち寄りください。

学祖・長谷川良信と社会事業の先覚者たち Ⅲ

— 高田慎吾・灘尾弘吉 —

淑徳大学アーカイブズ所長
長谷川 匡俊

今回は、学祖とほぼ同世代とみられる先覚者のなかから関わりの深い2名の人物を取り上げてみよう。長谷川は仏教者として、その歩むべき道を社会事業に見出していったわけだが、仏教者のみならずクリスチアンの社会事業家とも浅からぬ交流があった。それを彼は後年、次のように語っている。

私は幼少から、乏しい乍ら一箇の仏者を以て任じて来たが、どういうものか好漢、好漢を知るで真骨頂ある基督者には不思議と無二の親友がある。その中でも一夜にして千秋の友となった故小橋実之助氏、又色々と同類項の故高田慎吾氏夫妻、社会事業学徒として一頭地を抜いていた故篠崎篤三氏、現存では畏友鮎沢巖君、武藤健君などがある（下略）（「随縁随想」『長谷川良信全集』第3巻p.103）

そこではじめに、上記に見える高田慎吾と長谷川の関係について紹介してみたい。

高田慎吾（1880—1927）

高田は、大正期社会事業、とくに児童問題の理論的指導者で、著書に没後に編まれた『児童問題研究』（1928）がある。若き日の長谷川が斯界の先輩として深く敬愛し、かつ交流を重ねていた人物だが、47歳で早世した。1880（明治13）年熊本県に生まれる。少年期に家運の衰退に遭遇し、辛酸を味わったことがキリスト教に向かわせる契機となったようで、1909年に卒業する東京青山学院中学部時代には入信していた。熊本第五高等学校を経て、1908年東京帝国大学独逸法科を卒業。翌年、東京市養育院に就職し、まもなく、後に長谷川も就職する児童部巢鴨分院の主任となる。

当時、東大法科を出てこのような道を選択すること自体、異質であり彼の思想性をうかがわせるものがある。1912年社会事業の視察研究のため渡米、14（大正3）年内務省地方局救護課に入り、中央慈善協会の委員ともなる。18年内務省を辞職し、石井記念愛染園社会事業職員養成所設立に際し主任となった。さらに翌年大原社会問題研究所と共に大原社会事業研究所が創立されると幹事に就任した。同年てい子夫人が亡くなり、翌年には、生来健康に恵まれなかった高田自身も病魔に襲われるが、鈴木ふじ子と再婚。22年病再発、23年大原社会問題研究所より欧米へ派遣され、翌年帰国。その3年後の1927年7月5日、大成を惜しまれながら没した（『社会福祉古典叢書6・渡辺海旭・矢吹慶輝・小沢一・高田慎吾集』及び吉田久一解説を参照）。

高田は長谷川よりちょうど10歳年上で、しかも東京市養育院の先輩職員、巢鴨分院主任を務めた人物である。長谷川が巢鴨分院に就職したころ、高田は大原社会問題研究所（大原社会事業研究所）の幹事として、同所の設立運営に全力を注いでいたのである。時期的にみれば、職場こそすれ違いであったが、後述のように、社会事業に専心する二人の出会いは、それ以前からあった模様である。



高田慎吾

出典：『社会福祉古典叢書
6 渡辺海旭・矢吹慶輝・小
沢一・高田慎吾集』（1982
年、鳳書院）

ところで、淑徳大学図書館には 1919（大正 8）年 9 月発行の長谷川良信著『社会事業とは何ぞや』複写製本が所蔵されている。原本に押された所蔵印によれば、1936（昭和 26）年 1 月 22 日、大阪府立図書館・天王寺分館に収められたことがわかる。なお淑徳大学図書館に所蔵された年月を台帳で確認したところ、65 年 4 月、本学開学時であることが判明した（残念ながら当時は原本が未入手であった）。いかなる巡りあわせであろうか、この複写本中表紙の裏側に記された著者長谷川の文字（ペン書き、原本確認）に目が奪われてしまった。

右下に「死穴を掘りつつある著者より」、左上に「此の覚束なき雑篇、はづかし乍ら、十年親知を賜へる 高田先生に捧ぐ」と、著者の高田への献呈の辞が記されているのである。この「献呈の辞」によって、長谷川と高田との深い関わりが見えてくる。この献呈の辞に最初に注目されたのは、昨年ご逝去された故仲村優一氏であった。同氏は、ここに出てくる「高田先生」とは、本書の性格と内容及び二人の置かれた状況からみても「高田慎吾」に違いないと断定された。

そして二人の関係について、「そこに、民間性ということと、非常に優れた研究者であるということと、それから養育院の現場の仕事につながるという、そういう接点を持って高田先生を尊敬しておられた」、また「官に対する民、在野性ということで、長谷川先生がその立場を貫かれた、その理論的な骨組みの土台のところを高田慎吾先生があったのではないか」。さらに、宗教の違いを超えたつながりを含めて、長谷川があえて「『墓穴』ではなくて『死穴』という言葉をお使いになって、そしてこの本を、自分を一番よくわかってもらえる方の一人としての高田先生に献呈をされた、その心情のようなものが非常に強く私を打ちました」と述べている（仲村優一「学祖 長谷川良信先生の業績とその今日的意義」『大乘淑徳学園・長谷川仏教文化研究所年報』20 号、1992）。

先に長谷川が「色々と同類項の故高田慎吾氏夫妻」と言っている一文を紹介したが、それは、養育院の先輩と後輩、同じように闘病の身の上で、妻を亡くしているということ。加えて、宗教的信念や民間性重視が際立つ社会事業思想において、二人には多くの共鳴し合うものがあったということの意味しよう。いま高田の文章からいくつか引いてみれば、まず民間性ないし民間の役割に関しては、

我国の一般社会事業の進歩発達を計らんとするには、民間社会事業団体が自己の本領を自覚し、社会に必要な新施設を試むると共に、又一般人民の要求を代弁して、公的社会施設の実施を促すことに努力することにありと思ふのである。（「社会事業研究」第 13 卷第 10 号、1925. 前掲書 P. 498）

とあり、民間の先導性と人民の声の代弁性を強調している。つぎに宗教や宗教心の大切なことについても、

吾々が不幸なる人に対して慈善を為す所以のものは単にその不幸者に対して為すのではなくて、仏性を具へてゐる人、神格を有つてゐる人に対しての奉仕である。即ち神仏に仕ふるの心を以て其の人に仕ふるのである。（中略）救済事業は宗教の実行的方面である。されば救済事業家に宗教的信念の必要なことは言を俟たない所であるが、社会全般が又宗教心に富んで居らなければ此事業は決して発達を見ることが出来ない。救済事業の消長は一国宗教心の反映とも目すべきものである。（前掲書 PP503-504）

と記され、こうした社会事業に関する高田の考え方には、長谷川の前掲書等にみられる言説と一致する点が少なくないといえよう。

灘尾弘吉（1899—1994）

灘尾は 1899（明治 32）年 12 月広島県能美島に生まれる。24 年東大法学部を卒業して内務省に入省。社会事業との関わりでいえば、社会局社会部保護課事務官として、32 年から実施される「救護法」の

制度説明のため各地を訪ねて講演。37（昭和12）年には社会局社会部保護課長、翌年1月厚生省新設にともない同省社会局保護課長となり、同年3月施行の「社会事業法」を手掛けた。民間社会事業のリーダー長谷川との接点はこの前後に始まるといってもよいだろう。39年内務省会計課長、41年1月大分県知事、42年厚生省生活局長、衛生局長、44年4月内務省地方局長、45年4月内務次官、同年8月17日退官し、戦後47年11月公職追放となっている。戦後は政界に進出し、52年推されて衆議院議員に当選、以後連続12回に及ぶ。文部・厚生両大臣を歴任、衆議院議長となる。その経歴からうかがわれるように、教育行政、社会福祉政策の充実に貢献し、全国社会福祉協議会会長も務めた。

一方、昭和初期の社会事業界にあって、長谷川の注目点の一つに民間社会事業組織化への取り組みがあげられよう。政治や行政の都合に左右されることなく、常に主体的な立場や主張を保障される民間社会事業団体の設立を企図するようになる。詳細は省くが、内務省の影響が強い、既存の中央社会事業協会に対抗して私設社会事業連盟の結成に立ち上がった長谷川は、有志と共に29年12月「東京私設社会事業連盟」を設立し、さらに組織の輪を広げて31年には「全日本私設社会事業連盟」を結成して常務理事に就任、最初の一年余は自ら経営するマハヤナ学園内に事務所を置いたほどである。昭和恐慌で経営危機に陥っていた民間社会事業を救うべく、「国庫助成の確立」を要求した運動はその重要な一つであった。その延長線上に38年の「社会事業法」の成立があったのである。

後年、長谷川は福祉新聞社長・大石三良氏との対談（「先駆者の道」『全集』第4巻所収）の中で、同氏が「当時の社会局のまちがったやり方に対して、あくまで徹底的に追及するといった気概が、私設連盟づくりをやった連中にはありましたね。厚生省に対してあれだけはっきりいえる人は、いまの施設にはおりませんな」と水を向けると、長谷川は、「それを灘尾さんなんか『君にいじめられたな』とうらみ骨髓みたいという（笑い）。前の社会事業法というのを、ちょうど灘尾さんがデッチあげているときだった。それでもあの当時としては、あんなものでもできたからよかった。そのおかげで、当時民間施設は二千元とか三千元の金をもらった。またそういう助成金をもらう団体は年末になるとゴソッと特別奨励金が二、三千元きた。それでやっと民間社会事業が息をついた。いまになれば灘尾さんが民間社会事業の恩人だが、その時分はいくらくれるかわからんのに、こんな窮屈なものでしぼられちゃかなわんというわけで、こっちはどなりこんだわけだ（笑い）」と語っている。灘尾が保護課長時代のことである。

灘尾が、長谷川の事業や活動に言及したもので、いま手元にある二つの文章は、いずれも公式の文章である。一つは、長谷川が亡くなって間もなく発刊された『大乘淑徳タイムス』「追悼号」の巻頭を飾った弔辞で、いま一つは『社会福祉法人・マハヤナ学園六十五年史 通史編』（1984）巻頭の祝辞である。ここでは、「巨星落つ」とのタイトルで、長谷川の生涯とその事業、それを貫く思想・信念に言及している「追悼号」



の一文を紹介し、二人の戦前戦後を通じての交流を偲んでみたい。そこには、民と官との立場の違いこそあれ（ことに戦前期）、互いに相手を認め合う二人の親しい間柄が浮かんでくるようである。

このところお互いにかけてがってしばらくお目にかゝる機会がありませんでしたが、それでも毎日大変な忙しさだという御近況は常にかがって居りました。あの眼鏡の下で眼をしょぼつかせながらも元気に社会事業のことを語られていた先生の温顔が懐かしく眼に浮びます。

先生が若き学徒の協力を得ながら、東京西巢鴨のスラム街にセツルメント事業マハヤナ学園を創始されたのは遠く大正八年のことです。先生は学究としての理論と宗教家としての信念をもって着々と構想を拡げ、戦前すでに乳児院、保育所、母子寮、授産所、青少年の夜学、産婦人科病院、女子商業学校など多様な総合的社会事業を完成され、さらに今日いうところの地域福祉や保健福祉等進歩的な活動まではじめておられました。またこの間全国各地を歩いて広く民間社会事業の指導に当り、同志と協力して私設社会事業連盟を組織してその運営に全力を尽くされたことは、我々の記憶に新しいところでもあります。

文章はさらに長谷川の戦後へとつづき、大乘淑徳学園の創設、大巖寺と淑徳大学、ブラジル開教にまで及び、「御活動はとゞまるどころを知らず、あの小柄な先生のどこにあのようなエネルギーがひそんでいるのかと目を見張る思いでありました」と記されている。

このときの灘尾の肩書は衆議院議員・元厚生大臣 全国社会福祉協議会会長であった。

小特集：『淑徳大学五十年史』を読んで

社会福祉の原点である淑徳大学の創立 50 周年に思いを寄せて

宇部フロンティア大学
工藤 隆治

淑徳大学が創立 50 周年を迎えたことに対し、心よりお祝いを申し上げます。そして、卒業生の 1 人である私としては、大変、誇らしい思いを抱いております。今回『淑徳大学アーカイブス・ニュース』第 13 号に、「『淑徳大学五十年史』を読んで」（以下、「五十年史」と略す）というテーマで、私に執筆依頼が来ましたことを、光栄なことと感じております。

目次を見ますと、五十年史は、次のように構成されています。

沿革編

- 序 章 学祖長谷川良信の開学構想－淑徳大学創立前史－（1962～1964 年 昭和 37～39 年）
- 第 1 章 草創期の淑徳大学（1965～1968 年 昭和 40～43 年）
- 第 2 章 教育改革と揺れるキャンパス（1969～1979 年 昭和 44～54 年）
- 第 3 章 教育環境の一新と教学の新展開（1980～1995 年 昭和 55～平成 7 年）
- 第 4 章 利他共生の高度化と国際化から大学改革への萌芽へ（1996～2002 年 平成 8～14 年）
- 第 5 章 大学改革と学部のさらなる展開（2003～2011 年 平成 15～23 年）
- 第 6 章 21 世紀の教育ニーズに応える（2012～2015 年 平成 24～27 年）

資料編

以上、目次のタイトル、構成を概観しても、淑徳大学の 50 年の歴史の重みを感じることができます。私が、五十年史で最初に注目した箇所は、学祖長谷川良信先生が示された淑徳大学の開学構想が記述されている序章です。学祖は、学問的に整備され、専門的教育としての研究を推進できる社会事業における大学の創設を目指していました。社会事業研究・教育の中核的理念として、「人の育成と理想社会の建設」即ち「浄仏国土、成就衆生」を位置づけ、その実現のための理想の教育機関を「大学」に求めました。

当初、淑徳大学は、淑徳短期大学がある板橋に建設予定でしたが、諸般の事情で、千葉県に変更になりました。このことは、学祖が目指していた大学での教育に鑑みて、幸運なことであったように思います。千葉の大巖寺の地に淑徳大学を建設することにより、「大巖寺文化苑」構想のなかに、淑徳大学を位置づけることができました。大巖寺と淑徳大学は、個々独立した存在でありながら、相互に関連し、並び立つ存在として構想されました。学祖が示しました、「宗教・社会福祉・教育の三位一体による人間開発・社会開発」という考えを実現するために、理想的な体制が構築されたと考えられます。

次に、私のことと淑徳大学の歴史を結びつけて、五十年史を考えていきたいと思います。私は、社会人として仕事を経験した後、1989（平成元）年、淑徳大学社会福祉学部社会福祉学科に入学しました。五十年史では、第 3 章に記述された時代に、大学に入学したことになります。

1980（昭和 55）年から 1995（平成 7）年の間で、淑徳大学は、教育面でコース制を導入するなどの改革を行いました。私が入学した 1989 年度には、社会福祉学科にコース・専修制を採用しました。1989（平成元）年 4 月には、淑徳大学大学院社会福祉学研究科社会福祉学専攻修士課程が開学しました。五十年史（p. 135）には、大学院 1 期修士課程修了式の写真が掲載されています。この写真には、上田千秋先生、柏木昭先生、そして、現在、東洋大学教授の金子光一先生など、私にとって忘れることができない先生方が写っています。

私が淑徳大学に入学した 1 年目（1989 年）に、人生の転機となることがありました。それは、上田先生との出会いです。上田先生は、仏教大学から淑徳大学に異動され、社会福祉原論の科目を担当されました。私は、上田先生の社会福祉原論の講義を受講したとき、上田先生のゼミに入ることを決心しました。3 年のときに上田ゼミのもとで先生の指導を受け、その後、さらに社会福祉の研究を深めていきたいと考え、1993（平成 5）年 4 月、淑徳大学大学院の修士課程に入学しました。

五十年史には、1991（平成 3）年の龍澤祭で、当時、放送大学の教授であった仲村優一先生が、「大学で何を学ぶか」というテーマで、講演会を開催している写真が掲載されています（p. 129）。大学院入学後、1 年間上田先生から研究指導を受け、上田先生が淑徳大学をお辞めになった後 1 年間、仲村先生から研究指導を受けました。仲村先生には、大学院修士課程修了後も、大変、お世話になりました。私にとって、淑徳大学における人生の転機となる 2 つ目の出来事は、仲村先生との出会いでした。

第 3 章の最後に、貴重書コレクション「16 - 20 世紀・イギリス救貧法および社会福祉の歴史」というコラムが収録されています。エリザベス女王治世下で制定された、「エリザベス救貧法」（1597 年法）の原書が、淑徳大学千葉図書館に所蔵され、1597 年法が、イギリスの社会福祉制度・政策の変遷を示す第 1 次資料として、歴史的に貴重なものであることが、コラムのなかで紹介されています。1597 年法の原書は、上田先生が見つけたそうです。先生は、仲村先生に、1597 年法は、イギリスの社会福祉の歴史を知るうえで貴重な史料であるため、淑徳大学の千葉図書館に所蔵したいという意思を伝えたということでした。淑徳大学も上田先生の考えを受け、1597 年法を千葉図書館の蔵書として加えることになったそうです。1597 年法が、イギリスの社会福祉の歴史資料として、淑徳大学に保管されていることは、千葉図書館が社会福祉の歴史研究において、重要な意義がある施設となっていると考えられます。

1999（平成 11）年 4 月に、私は、淑徳大学大学院社会学研究科社会福祉学専攻博士後期課程に入学し、現・淑徳学園理事長の長谷川匡俊先生のもとで、社会福祉研究を続けました。修士課程修了後、大学院後期課程

入学までの間に、社会福祉法人淑徳福祉会による特別養護老人ホーム「淑徳共生苑」が創設され、大学では、看護学部看護学科が開設されました。その後、教育学部こども教育学科、人文学部表現学科及び歴史学科が開設され、淑徳大学は、着実に発展をしました。

淑徳大学において、私は、人生を生きていくうえでの基盤を築くことができ、生涯にわたる恩師に出会うことができました。五十年史を読むことにより、私の貴重な体験や人との出会いを思い出すことができました。そして、学祖が考えた、「宗教・社会福祉・教育の三位一体による人間開発・社会開発」を基盤に、淑徳大学は発展を続け、今後も進化し続けていくことを確信しています。

『淑徳大学五十年史』を読んで

東海大学学園史資料センター
椿田 卓士

このたび『淑徳大学五十年史』を拝読する機会を得た。筆者も現在『東海大学七十五年史』編纂に携わっており、同じく大学の年史編纂に関わる立場として感じたことをいささか述べてみたい。

ここであらためて『淑徳大学五十年史』の内容をみると、本編は「沿革編」と「資料編」で構成されている。「沿革編」は序章～第6章に区切られ、開学前史から現在（2015年）に至るまでの通史が叙述されている。各章には随所に写真・図版が組み込まれ、大学のあゆみを通年的に追うことができ、非常に読みやすい体裁に感じられた。また、各章にみられるコラムも、本文とは異なる視点で書かれており、全体のバランスをうまく整えているという印象をうけた。

一方、「資料編」については、大学概要から組織図・学部の変遷、学生数変遷、年表など、基本的な情報が盛り込まれている。一見地味にもみえるこれらのデータ群は、次回の年史編纂にも継承される重要な記録となるであろう。あえて注文をつけるとすれば、研究組織・事務組織の取り扱い部分である。「資料編」では現行の組織図のみが掲載されていたが、組織の変遷については取り上げられていない。掲載スペースや体裁の問題かと思われるが、実はこういった組織の変遷も重要な沿革資料となる。本学（東海大学）の場合でいうと、近年学内の各部署は頻繁に組織変更・改称を重ねている。今の〇課の前身は△課、といった些細なことですらも遡及して追うことが徐々に困難になってきている。次回の年史編纂を見据え、こうした年史編纂の機会に部署の沿革や推移も記録しておくことは重要であると考えている。

以上、簡略ながら一読した感想を述べてみた。従来、年史といえば函入り上製本で活字中心の重厚かつ豪華なイメージが定番であったが、近年の傾向では、予算的な問題やデジタル編集技術の進展により、ビジュアル性の高いコンパクトな年史が多くなっている。

いうまでもないことであるが、大学の年史の役割とは、これまでの学校のあゆみを記録に残すことであると同時に、次世代へその歴史を継承していくための節目の記録とすることである。年史の価値は、ページ数の多寡や体裁ではなく、如何に建学の目的の再認識や今日に至るまでの経緯、さらに未来に向けての展望を伝えるためのアイテムとなるか、である。また一方で、年史は広く関係各位に手にとって読まれることが前提であって、周年記念イベントの場で手渡される単なるお土産と化しては意味がない、とも考えている（近年では、安くあげるためにPDF版をディスクに入れたものが引き出物として渡されることもあるが、これではまず読まれることはないだろう）。『淑徳大学五十年史』は、「かわらないもの」と「かわってゆくこと」を伝えるためのアイテムの一つとして、また大学史を手堅くまとめた年史スタイルとして評価されるのではないか。

ところで、本書を手にして真っ先に脳裏に浮かんだことは、その五十年間の歴史をまとめあげ編集した執筆者・編集担当者の方々の労苦であった。「年史づくりは体力勝負」とは、筆者がかつて各地の自治体史編纂に携わった折、現場でよく耳にした言葉である。過去の記録を収集し、一つの歴史を編み上げる過程、そしてそれを年史というかたちにまとめ上げるには、ノウハウ以前に編集に関わる人間の気力と体力が何よりも必要とされるのである。その意味では、大学における年史編纂も同様であろう。

何よりも目を引いたのは、過去の年史編纂との間隔である。編集後記によれば、『五十年史』以前の年史編纂は1976（昭和51）年の『淑徳大学十年史』であり、『五十年史』はそれに続く二度目の編纂ということである。すなわち、前回の編纂から四十年の空白があることになり、その間の沿革資料を集め校史を解析することは、並大抵のことではなかったのではないかと拝察する。

手前事で恐縮であるが、筆者が所属する東海大学学園史資料センターにおいても、現在東海大学75年史の編纂が進められている。ここでやはり焦点となっているのが、前回の50年史以降の25年分の歴史を如何に取り扱うか、という点である。この期間は、いわゆる大学設置基準の大綱化が進められた時期であり、全国的にみても大学の機構が大きく変化した時代である。単純に50年史の成果をなぞって25年分の出来事を付け加えればよい、という訳にはいかないのである。

『東海大学五十年史』は1993年に上梓されたが、その前には20年、25年、30年、40年といった各周年の節目に年史を刊行していた。その編纂過程における史資料が相応に残っていたこと、また建学時の関係者が編集当時は比較的存命中だったこともあり、『東海大学五十年史』は計画通り刊行された。しかしながら、それ以降現在に至るまでは年史刊行の機会は無かったこともあり、現在の『東海大学七十五年史』に関しては、その後の25年分の情報や資料の収集が思っていた以上に困難であることに日々直面している。その意味で、40年間のブランクをどのように埋めて編集を進められたのか、機会があればその辺りのご苦労などぜひお伺いしたいところである。

以上、雑駁ながら本書を拝読した拙い感想を述べてみた。本書の趣旨や意図を十分に理解していないところについては、ひとえに筆者の能力不足によるものであり、ご寛恕を請う次第である。最後に、拙い内容ながらも本稿執筆の機会を与えていただいた、淑徳大学ならびに淑徳大学アーカイブズに対し、末筆ながら記して感謝の意を表する次第である。

「淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会」のご案内

— 参加者を募集しています —

淑徳大学アーカイブズでは、これまで地元の方々との交流を深めるため、「史料講読会」を開催してきましたが、このたび会の名称を「古文書に親しむ会」と改め、さらに多くの方にご参加いただけるよう新規会員の募集をおこなうことといたしました。内容は基本的にこれまでと同様、当アーカイブズが所蔵している史料をはじめとして、江戸時代から近代にいたる史料を幅広く読みながら、当時の社会や地域について学んでいこうというものです。

会は毎月第2・第4金曜日の午前10時から午後3時頃まで、淑水記念館で開催しています。どなたでも参加できますし、その日の都合に合わせて途中から参加いただくこともできます。初心者の方も大歓迎ですので、くずし字が読めるようになりたい方や昔のことに興味のある方はぜひ当アーカイブズまでご連絡下さい。皆さんで楽しく史料を読んでいければと思います。

淑徳大学アーカイブズ日誌（2016年1月～6月）

- 1月8日 「淑徳大学50年のあゆみ展」撤収作業。
- 1月13日 2015年度第7回淑徳大学自校教育研究会出席（於池袋サテライトキャンパス）。
- 1月25日 第95回淑徳大学アーカイブズ史料講読会開催。
- 2月1日 『淑徳大学アーカイブズ・ニュース』第12号発行。
- 2月7日 2015年度第8回淑徳大学自校教育研究会出席（於池袋サテライトキャンパス）。
- 2月12日 福田会育児院史研究会出席（於東京児童福祉研究所九段研究所）。
- 2月17日 2015年度第9回淑徳大学自校教育研究会出席（於池袋サテライトキャンパス）。
- 2月22日 千葉市の橋本由利江氏より巣鴨女子商業学校の昭和20年度の卒業証書寄贈。
- 2月26日 第96回淑徳大学アーカイブズ史料講読会開催。
- 2月26日 専修大学の宇都榮子先生と中京大学の太友昌子先生吉田久一氏資料閲覧のため来室。
- 2月29日 「吉田文庫」を4階のアーカイブズ倉庫に移す。
- 3月1日 淑徳中高等学校所蔵の「教職員名簿」（明治～昭和）撮影の下見および打合せ（於淑徳中高等学校）。
- 3月2日 学園本部にて理事長を交えてアーカイブズ展示室の改修について打合せ。
- 3月3日 アーカイブズ展示室の物品を新アーカイブズ展示室に移す。
- 3月8日 淑徳中高等学校の「教職員名簿」撮影（於淑徳中高等学校）。
- 3月9日 創立50周年記念事業実行委員会出席（池袋サテライトキャンパス）。
- 3月10日 全国大学史資料協議会東日本部会第99回研究会参加（於明治大学生田キャンパス）。
- 3月11日 明星教育センター自校教育講座参加（於明星大学日野校）。
- 3月11日 第97回淑徳大学アーカイブズ史料講読会開催。
- 3月15日 淑徳短期大学の梅原先生基雄教授より図書寄贈。
- 3月16日 アーカイブズ展示室改修工事開始。
- 3月18日 アーカイブズ展示室の改修について打合せ。
- 3月20日 淑徳大学アーカイブズ叢書5『高瀬真卿日記 五』刊行。
- 3月22日 2015年度第2回淑徳大学アーカイブズ運営委員会開催（於学園本部）。
- 3月23日 アーカイブズ展示室の改修について打合せ。
- 3月25日 第98回淑徳大学アーカイブズ史料講読会開催。
- 3月25日 『吉田久一先生遺著刊行記念の集い講演記録集』刊行。
- 3月28日 福田会育児院史研究会出席（於東京児童福祉研究所九段研究所）。
- 3月30日 アーカイブズ展示室の改修について打合せ。
- 3月30日 石津明彦氏より吉田久一関係資料と吉田すみ氏関係資料寄贈。
- 4月4日 アーカイブズ展示室リニューアル・オープン。
- 4月8日 第99回淑徳大学アーカイブズ史料講読会開催。
- 4月18日 東海大学学園史資料センター見学。
- 4月21日 福田会育児院史研究会出席（於東京児童福祉研究所九段研究所）。
- 4月22日 第100回淑徳大学アーカイブズ史料講読会開催。
- 4月23日・24日 日本アーカイブズ学会2016年度大会参加（於東京外国語大学府中キャンパス）。
- 4月27日 元家の光協会勤務前野光衛氏と元全中婦人部勤務中村慶子氏に吉田すみ氏に関する聞

き取り実施。

- 4月27日 2016年度第1回淑徳大学自校教育研究会出席（於池袋サテライトキャンパス）。
- 5月7日 千葉・関東地域社会福祉史研究会2016年度第1回運営委員会開催（於東京キャンパス）。
- 5月11日 2016年度第2回淑徳大学自校教育研究会出席（於池袋サテライトキャンパス）。
- 5月13日 第101回淑徳大学アーカイブズ史料講読会開催。
- 5月14日・15日 第44回社会事業史学会大会参加（於石巻専修大学）。
- 5月26日 全国大学史資料協議会東日本部会2016年度総会参加（於東京農業大学）。
- 5月27日 第102回淑徳大学アーカイブズ史料講読会開催。
- 5月27日 福田会育児院史研究会出席（於東京児童福祉研究所九段研究所）。
- 5月31日 修復に出していた所蔵資料2点納品。
- 6月7日 総合福祉学部山口光治教授と大学院生5名吉田久一展見学。
- 6月8日 2016年度第2回自校教育研究会出席（於池袋サテライトキャンパス）。
- 6月10日 第103回淑徳大学アーカイブズ史料講読会開催。
- 6月11日 長谷川仏教文化研究所の古宇田亮修氏より今年2月22日にテレビ東京で放送された「世界ナゼそこに日本人」のブルーレイ・ディスク寄贈。
- 6月24日 福田会育児院史研究会出席（於東京児童福祉研究所九段研究所）。
- 6月25日 日本歴史学協会資料保存利用問題シンポジウム参加（於駒澤大学駒沢キャンパス）。
- 6月25日 千葉・関東地域社会福祉史研究会2016年度第2回運営委員会開催（於東京キャンパス）。
- 6月30日 明星学園の繁田真爾先生論文に掲載する吉田久一氏の写真選定のため来室。

淑徳大学アーカイブズでは、大学及び大乘淑徳学園に関係する資料を広く収集しています。

- ①大学及び学園が発行した新聞・雑誌・広報誌・年報・報告書等。
- ②学生時代の写真・講義ノート・教科書・手帳・日記・記念品・記章・各種書類等。
- ③学生時代に使用していたもの。
- ④大学及び学園のサークルや研究会の活動を示すもの。

上記以外の物でも結構ですので、お気づきのものがあればお気軽にご連絡下さい。

また、大学及び学園の各部署や学部学科、機関で保存期間の満了した文書、あるいは廃棄の対象となる文書が発生した場合は、大学アーカイブズまでご一報下さい。



淑徳大学

アーカイブズ・ニュース 第13号

NEWSLETTER of SHUKUTOKU UNIVERSITY ARCHIVES

発行日 2016年8月1日

編集・発行 淑徳大学アーカイブズ
〒260-8701

千葉県千葉市中央区大巖寺町200

TEL 043-265-7526（直通）

e-mail archives@soc.shukutoku.ac.jp